

巨乳サキュバスの巣穴



セイシステムズ

重い緞帳が掛かったように視界は真つ暗で、頭にぼんやりと痛みを感じ、不意に意識が戻った。気がつくと、僕は知らない森の中に倒れていた。

湿った土と草の匂い。体を起こすと、目の前に女の子が倒れているのが見えた。

彼女は動かない。冷たく、静かな姿がそこにあつた。そこかしこに白く粘り気のある液体が飛び散つて、強烈な匂いがしている。

彼女はズタボロだった。法衣は破れ、痣だらけで、白い肌が露出している。激しく陵辱された後だった。地面に横たわる目は虚ろで、息は止まっていた。折れた錫杖を目にして、僕は全てを思い出した。

「エレナ……」

僕はしばらくその場に座り込んでいた。何を考えるべきか、何をすべきかも、わからなかった。ただ、旅はまだ終わっていないという思いだけが、頭の片隅で響いていた。

魔王を倒すための旅の途中だった。それなのに、気づけば仲間が息絶え、僕一人が森に取り残されていた。どうしてこうなったのか、思い出そうとするが、頭の中は霧がかかったようにぼやけている。

森は不気味なほど静かだった。鳥の鳴き声も風の音もない。僕は立ち上がり、仲間の死体を置いて歩きはじめた。

振り返ることはしなかった。もう生き返らないことは、理解していた。

僕は冒険者だ。勇者として魔王を倒す使命を負っている。それは変わらない。

だけど今、この森の中で感じているのは、絶望感だけだった。

□

つい数時間前のことを思い出す。その日、僕は仲間たちとともに森の奥深くへと足を踏み入れた。

僕らの使命は、森を抜けて魔王城へ通じる坑道に入り込むことだった。

森にはクリーチャーが出る、と村人から聞いていた。だから僕らのパーティー4人はいつにもまして慎重に隊列を組んでいた。

先頭にはイゼルが杖を構えていた。彼は魔法使いだ。淡い水色のローブを纏い、長い杖を持っている。彼が呪文を唱えるとき、風が音を立て、まわりの空気が鋭くなるのが分かる。

後ろにはエレナが続いていた。彼女は僧侶だ。金髪を肩まで垂らし、雰囲気はキツネリスに似ている。顔はいつも穏やかな微笑みを湛えている。彼女の瞳は深い緑色で、目が合うと、自分の苦悩や不安がふつと消えてしまいう気がする。実際、彼女の祈りは幾度となく僕たちを救ってきた。

最後はヴァルド。彼は盗賊だが、その体つきを見れば、ほとんど戦士といっても差し支えない。

筋肉はまるで大地が持つ原始的な力を象徴しているかのようになり、彼の全身に張り巡らされている。見た目の重厚さ通り大食漢で、いつも大声でゲラゲラと陽気に笑っている。

彼らの存在がまるで盾となり、前に立ちはだかるとどんな脅威も乗り越えられてきた。どれだけ厳しい道であろうと、彼らがいる限り、何も恐れることはないと思えた。

ただ、その瞬間が来るまでは……。

□

その日森は静かで、ただ風が木々を揺らす空気だけがクリアだった。しかし次第に霧が立ち込め始め、僕らの視界は徐々に奪われていった。

「霧が濃くなってきた。気をつけろ」僕は振り返って仲間呼びかけた。